

[各校の重点取組について]

スローガンを「1に体力2に気力3に学力ぐんぐんのびる」とし、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かな児童の育成をめざして、孝
共通認識の下重点取り組みを決定した。

学校教育に関する重点取組

		評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
1 教育・学習内容を充実させ、確かな学力を身につけさせる		2.8	3
(1) 授業改善の取組を促進するとともに家庭との連携により、学力向上を推進する (2) 特別支援教育の取組を充実させ、自立や社会参加に向けた主体性を育成する			
取組とその成果	課題と改善策		
(1)「学力向上委員会」を、児童の学力向上に重点を置き、授業改善を研究主任中心に全職員授業1実践公開を再度徹底し、指導案の見直しや教材教具の効果的な利用等について推進した。 (2)教育支援員及び特別支援ボランティアの活用及び、個別の指導計画・個別の支援計画の内容確認及び配備状況の再点検を行った。 (3)図書ボランティアを活用し児童の読書意欲を高めた。 (4)夏季休業中に学習指導を行い、学習意欲を高め学力向上に努めた。 (5)基礎基本はもとより、発展学習にも取り組み、学習意欲を高めるよう努めた。	(1)朝学習での学力定着度の検証・図書室利用状況における読書力向上検証等、データを伴ったの実証を示すことの大切さを通知した。 (2)教育支援員は週3回勤務のため、効率よく配置するための担任との話し合いや、個にあった手立ての情報交換を密にしたので、児童へのきめ細やかな指導ができた。 (3)ボランティアによる読み聞かせ等で、児童が多くの図書に触れる事ができ、意欲が高まった。本の貸し出し冊数や図書室の利用度が増加した。パーセンテージでの集計は、今後実施予定。 (4)多くの児童が参加し(1クラス平均4割)、担任以外にも関わったことで児童の学力が把握できた。 (5)基礎基本に力を注ぐ傾向にあるため、発展学習への取り組みは今一歩である。全職員で取り組めてはいない。		
2 心の教育を充実させ、自己実現の意識の高揚を図る		2.9	3
(1) 道徳性育成の取組を促進し、思いやりに満ちた人間関係及び社会とのかかわりづくりに努める (2) 基本的な生活習慣確立の取組を促進し、心身共に健全な育成を図る (3) キャリア教育の取組を促進し、社会的自立に必要な能力を育成する			
取組とその成果	課題と改善策		
(1)オープンスクールでの全クラス一斉道徳公開授業を実施し、日ごろから児童の道徳性の育成を促進するよう努力した。 (2)早寝早起きに関して、5年生の生活実態調査で生活の乱れが少しある事がわかったので、保護者に対してアンケート結果を公表し家庭の協力も得て、児童の健全育成を図った。 (3)学力向上委員会「キャリアノート」の見本を提示し、本年度からキャリアノートの作製を本格的に構想を練り、開始を図った。 (4)道徳は兵庫版道徳教育副読本を取り入れ、日常的に道徳性の育成に取り組んだ。 (5)児童や保護者に対し、情報モラルやSNSに関することについての研修会を行った。	(1)オープンスクールばかりではなく、授業参観・懇談会等でも公開授業を行い、保護者の意見をアンケート等で求めた。 (2)児童の実態を公表することで家庭との連携を図った。新年度での児童の変容に期待したい。 (3)キャリアノートの作製を始めるにあたって、様式や取り組む方法等に意見のばらつきがあったが、学力向上委員会で討議を重ね、全学年統一して実施することに決定した。 (4)クラスによって副読本の使用頻度がまばらで、うまく活用できなかったクラスもある。 (5)高学年や保護者に対しての講演会を実施し、理解が深まったが、低学年でもスマホを持っているので、使い方やモラルについての学習を今後実施する必要がある。		

3 食育や体育を充実させ、健康な体づくりに取り組む (1) 食育を通して生活改善の取組を促進し、望ましい生活習慣を育成する (2) 体育・スポーツ活動の取組を促進し、体力・運動能力の向上を図る	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3	3
取組とその成果	課題と改善策	
(1) 栄養職員による食育指導・講師を招聘しての食育指導とつぼみスクール(4年生女子対象の下着教室)の実施・養護教諭による性教育等を通して望ましい生活習慣を図った。 (2) 年間指導計画に従って、体育授業を効率よく行い、学習の目当てを各自に持たせて運動させた。(体育大会での組体操の内容を一新) (3) 学校保健委員会を実施した。 (4) マラソンカードや縄跳びカードの導入及び縄跳びチャレンジ週間(長縄)の行事計画等を行った。	(1) 主に低学年の食育指導が中心なので、高学年に対しても食育指導が必要だが、食育の授業は行えなかった。 (2) 少しずつではあるが、運動能力テスト(スポーツテスト)での結果が向上している。(3) 講師として思春期保健相談士を招聘し6年生と保護者向けにそれぞれ講習会を開催した。その結果体のことや衛生面について理解が深まった。ただ、保護者の参加が少ないので啓発する必要がある。(4) 長縄チャレンジに積極的に取り組み(全校長縄体育3回)、各クラスの跳躍回数が伸びた。	

4 安全な教育環境を確保し、防災意識の高揚を図る (1) 安全取組の取組を促進し、登下校及び校内の安全確保を図る (2) 防災教育の取組を促進し、危機管理能力の向上を図る	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	2.9	3
取組とその成果	課題と改善策	
(1) 月1回の安全点検では、遊具・校舎内の一斉点検等実施した。非常変災害時(警報発令時)における、集団下校措置等臨機応変に対応した。(2) 地震及び津波における避難所としての学校災害対応マニュアルの見直しを実施し、内容をより具体化した。 (3) 学期に1回以上教職員で校門指導を行った。	(1) 警報発令が最近早くなっているようなので、状況判断等を今後もしっかりして行かなくてはならない。(地区校長会で統一した一応の見解を持った) (2) 学校対策マニュアルの内容見直しを行い、来年度は休み時間における避難訓練の実施や出火場所等を事前に職員に連絡しないなど、緊急性を持たせ、実施するよう変更した。また、遊具(吊り輪)での危険性も発覚したので、早急に改善を試みた。 (3) 各学年で対応し、しっかり実施できた。	

5 家庭・地域・学校の連携を深め、信頼され、活力に満ちた学校園づくりに取り組む (1) 教職員の資質向上の取組を促進し、学校の組織力及び教育水準の向上を図る (2) 地域の教育力を活用した取組を促進し、開かれた学校園づくりを図る	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3	4
取組とその成果	課題と改善策	
(1) 若手教師の会(若里会)の毎月の実施と、夏季休業中における研修の積極的参加を促進し、教育水準の向上を図った。 (2) 本年度地域学校協働本部の委託を受け、地域コーディネーターと共に協力し、学校の開放と地域人材の活用を計画した。 (3) 学校ホームページで児童の活動の様子を随時発信した。 (4) 他校の研究発表会や管外研修で得た情報や知識を校内で伝達講習会を開いた。	(1) 若里会では時間がなかなかとれないので、月1回の開催が難しいが、ベテラン教諭の参加もあり充実した内容になった。 (2) 地域コーディネーターと共に協力し、本年度は漢字検定試験を校内で行った。(全学年で約70名受験した) (3) ホームページ「校長室より」を発信し(70回以上)地域や外部に対して情報を共有した。 (4) 外国語の全国大会への参加や算数科における先進校視察等教職員の研修を充実させた。資料等で共有を図ったが今後はプレゼン等の工夫をして広めていきたい。	

教育目標	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3	3
(1) 教育目標の達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 教育目標の具現化と指導の充実		

取組とその成果	課題と改善策
(1) ・教員の授業力向上のため、講師を招聘した。 ・授業補助支援として、基礎基本を充実させ、応用力も取り入れた学習に取り組み、放課後学習では、3・4年生対象に基礎基本の定着及び発展的な学習を盛り込んだ。 ・地域人材活用としてお話しグループの活用及び、尼崎市社会教育課と共に、地域協働本部を立ち上げ、積極的な地域人材を確保した。 (2)結果を出す事に重点を置き、明確な数値目標を掲げ実践するよう心がけた。 (3)教育目標等の全職員の意識付けを、年度当初に図った。	(1)年間3回大学准教授を招聘し、算数科を中心に授業公開をした。放課後学習支援員を採用し、児童の基礎基本の定着を図った。その成果を確かめるためのテスト等の実施を計画したが学年に差が出て、図部手の学年では実施できなかった。 (2)5年生の生活実態調査や6年生の学力学習調査をホームページ等で公開することで、本校の児童の弱点を明確にし、今後の指導に役立てることができた。 (3)学年最初の懇談会で、教育目標を知らせたが、その後は余り触れる事がなかったので、もっと機会がある度に保護者への伝達が必要であった。

研究テーマ	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)
	3.1	3.5
(1) 研究テーマの達成に向けた充実した教育活動の展開 (2) 研究テーマの具現化と指導の充実		

取組とその成果	課題と改善策
(1)本年度は「伝え合う活動を通して、思考力・表現力を育む授業を創造する」事に重点を置き、実践してきた。そのため、東海学園大学准教授(年間3回)園田学園准教授(年間1回)芦屋市立浜風小学校教諭(年間1回)及び市教育委員会指導主事を招聘し、児童の実態にあった指導方法の確立と、アクティブラーニングも視野に入れ、研究を重ねた。 (2)学習方法を全学級統一し、実践することで学年が変わっても戸惑うことなく取り組めるようにした。 (3)各学年の研究テーマを毎回確認し、研究推進委員会で情報交換や授業改善の工夫を話し合った。	(1)算数科での指導法が講師によってばらつきが無く、統一して研究が進んでいるので、全学年取り組みやすかった。 (2)一人1実践はもとより、希望があればいつでも公開授業を行い、学年相互や学年を越えての参観授業を実施した。それにより、自らの手立ての不足や力量の見直しなど、把握することができた。また、授業の流れが全学年統一できているので、展開が周知徹底しているので子どもたちが安心して学習に取り組めた。(3)学年相互の関係や発達段階も調整できるので、研究推進委員会での話し合いは充実できている。

	評価Ⅰ(教職員)	評価Ⅱ(校園長)

取組とその成果	課題と改善策